

## 第17回 佐賀大学ティーチング・ポートフォリオ・作成ワークショップ



日程：2017年8月27日～29日  
場所：FITセミナーハウス(湯布院)  
佐賀大学 芸術地域デザイン学部  
小木曾 誠

[ogisom@cc.saga-u.ac.jp](mailto:ogisom@cc.saga-u.ac.jp)

## 目次

### はじめに

- 1) 教育の責任
- 2) 教育の理念
  1. 求める学生像
  2. 教員としての在り方
  3. 芸術についての考え方
- 3) 教育の方法
  1. 基礎技術の習得
  2. コミュニケーション能力の向上
  3. 絵画の歴史に対する理解
  4. 展覧会の企画運営
    - 4-1 礎展
    - 4-2 S-YOU-GA 展
    - 4-3 その他の展覧会
    - 4-1 展覧会にまつわる懸念
  5. 継続力
- 4) 学習成果
- 5) 教育の改善及び今後の目標
- 6) 添付資料

## はじめに

私が所属します佐賀大学芸術地域デザイン学部は発足2年目の新しい学部で1.5年しか授業をしておりません。そのためシラバスに沿って説明するのではなく、分かりやすく私の教員として10年の教育の振り返りを行うことをご了承いただければと考えています。

### 1) 教育の責任

佐賀大学芸術地域デザイン学部は平成28年4月に開講した新しい学部です。まだ最上級学生は2年生と、学習成果途中です。私がこれまで行ってきた文化教育学部での教育の根幹は「プロフェッショナル」の育成にありました。最高学府である「大学」では単に趣味人の育成ではなく、どの職業においても「プロフェッショナル」は存在し、社会において中心となる人材育成が必要です。私はその中でも「西洋画」という分野の教育において、「作家」を目指すことを目的にさせます。はじめに学生に「プロを目指しなさい」と伝えます。学生たちは初め戸惑いますが、「プロフェッショナル」を意識することでより**基礎技術**の習得に力を注ぎ、**継続力（気力体力）**を身につけ、自己評価能力を培い、**探究心、コミュニケーション能力**を身につけていきます。「作家」になる学生は実際は4分の1程度ですが、中学高校教員になる学生は高い技術や知識を身につけ教壇に立ち、一般企業に就職する学生は展覧会運営等で培った企画力や発想力、コミュニケーション能力を身につけることで社会に寄与していきます。このような能力を身につけさせ「プロフェッショナル」育成を私の教育の責任と考えています。

私が担当する「西洋画」専攻では1学年7~8名を担当します。2年次より分野に分かれるため、1年次には幅広く全体のことを学ぶ「共通基礎科目」（1年前期）、「西洋画Ⅰ」（1年後期）を履修します。1年次2月ごろに専攻分けを行うのですが、定員（7名）をオーバーした際には、GPA、西洋画Ⅰの授業の成績を参考にします。3年生夏ごろ学生は「作家」「教員」「就職」志望と分かれていますが、まず専攻分けの時点で、その「プロを目指しなさい」という言葉を伝えると何人かの学生が専攻を考え直し、他の専攻に移ります。いつも伝えていることは「私自身プロですので厳しいですよ。」と言います。私の研究室は常時2~4年生、大学院2年まで毎年30名ほどが在籍しています。学生たちは前期「西洋画室」という教室で制作しています。制作環境は日本で一番悪いと自負するぐらい、狭い中肩を寄せ合いながら制作しています。「日本一環境の悪い教室で、日本一の学生を育てる。」【添付資料1】というのがモットーです。近年、多くの学生が巣立ち、全国的に活躍してくれていることは大変喜ばしいことです。

担当する科目は以下の通りです。

教養教育：大学入門学部1年次 必修受講生 30人、インターフェース・芸術創造Ⅱ 選択 受講生10人、インターフェース・芸術創造Ⅲ選択 受講生20人

大学院：絵画特論Ⅰ（通年）受講生2~3人、絵画特別演習（前期、後期）受講生2~3人、実践授業研究受講生2~3人、西洋画素材技法研究受講生2~3人、西洋画表現特別研究受講生2~3人

学部教育：西洋画（前期）受講生2人、応用西洋画（前期）受講生15名、基礎西洋画（後期）受講生20名、素描Ⅱ（後期）受講生2名、美術・工芸学外実践活動受講生10名、総合芸術学習（西洋画）（通年）受講生10名、共通基礎 1年生必修55名、芸術表現A(西洋画) 学部1年生必修55名

## 2) 教育の理念

1. **求める学生像**：基礎技術を習得し、高いコミュニケーション能力有し、絵画の歴史に対する理解を深め、早期社会進出の場として展覧会等を行うので企画、運営能力が身に付き、継続力（気力、体力）を培い社会に貢献出来る人材育成を行います。このような能力を身につけることで「プロフェッショナル」としての自覚が芽生え、趣味とは一線を画す人材となります。「プロフェッショナル」は「責任」を伴います。学生という立場を超え、学生時代から社会と繋がることを望んでいます。
2. **教員としての在り方**：学生を育てるためにはまず私自身が「楽しむこと」が大切になります。ものごとを臆することなく経験することはとても体力、気力を有します。しかしそこで培った経験は財産となり、肥やしとなり、生きる礎になります。教員でもあり作家でもある私自身も多くの失敗を学生たちに見せ、多くの称賛を学生たちに感じてもらうことが私の責任でもあり、教育の理念です。
3. **芸術についての考え方**：imagination（想像）と creation（創造）。芸術における大事なキーワードとして話をします。絵は真っ白なキャンバスや紙に大きな宇宙を描きだします。この行動は古代から行われてきた人類の営みです。この二つの「そうぞう」なくして人の生活は豊かになりません。教育もこの「そうぞう」を大事にしながら行っていくことで、変わりゆく時代に対応していくことが出来るでしょう。

## 3) 教育の方法

### 1. 基礎技術の習得

私は武蔵野美術大学に1年、東京芸術大学に博士課程まで併せると9年。合計10年大学生をしていました。また東京の予備校で7年、専門学校を2年、カルチャーセンター2年。一番下は高校1年生、上は84歳のご老人まで教えるという職業に就いてきました。また現在も大学の教育以外に、ワークショップや講演会など幾多にわたり開催いたします。教育の中で一番大切なことは「自信」をつけさせることと考えています。そのためには「技術」というものが必須となります。一方、芸術教育の中で圧倒的に時間を割かれるのは「コンセプト教育」です。私は東京にいた際、この「コンセプト教育」重視に非常に違和感を覚えていました。「何故描くのか」という大きな宿題は、長い作家人生の中で徐々に深みを帯びていきます。しかし大学に入りたての学生に「何故描くのか」を問うても多くは「好きだから」という返答です。ここで頭を悩ませ、手が止まってしまう学生を多く見てきました。まずは基礎技術習得から始め、徐々に（2年次後期より）徐々に作品のコンセプトについて話をしてもらいます。

#### 【グリザイユから着彩へ】

まず一番初めに行う具体的な油絵の技術指導は、グリザイユ技法からグレースを用いた着色方法を教授します。私が実際に描いて見せることも多くあります。具体的にはグリザイユとは英語で「グレー」のことで、17世紀の西洋画の描き方です。【添付資料2】の絵の④枚目がグリザイユの段階です。この段階までは、油絵の具を使い慣れていない学生でも、デッサンは描いたことがあるので、容易に描き出すことができます。ほとんどの学生は、受験時に鉛筆や木炭など白黒の画材で描いて入学してきているので、油絵の白と黒だけを使って描くことはそう難しくはありません。【添付資料2】の⑤番目の写真（中央）から着色していくのですが、透明色を主体として描いていきます。透明色は青ならばウルトラマリン、赤ならばクリムソンといった絵具を使用します。白色絵の具といった不透明色は半乾きのうちから塗り描いていってもよいでしょう。ウエットオンウエットという方法は、西洋絵画の伝統的な方法ですが、日

本の受験教育（油絵を1日で描いたりする。）では適さない。油絵の具の特性である「厚塗りができる」「可塑性がある」「透明性がある」といった特徴を一手にこの授業で教えることができます。【添付資料3】

### 【合宿】

春休み(2月下旬)、入試業務がひと段落した1週間、月曜日から土曜日まで集中的に絵を教えることもします。「1日1枚描く」とても学生にとっては大変なものです。泊まり込みではないのですが、一日8時間描くということで「作家」としての意識付けを行います。6日連続で行うので気力体力もつきます。そしてこれは「授業ではありません。だから単位は出しません。その代り厳しく、ある程度まで描けるようにします。」と言って学生を募りますが、毎年20人は受講します。油絵は乾燥が遅く1日で描くことは大変困難な作業ですが、卒業生でプロとして活動している人たちが皆口をそろえて4年間で一番充実したのは「合宿でした。」と答えてくれます。

### 【名画の模写】

また、授業以外の時間でも様々なことを行っています。今高等学校教育の現場では「美術教員」の常勤の先生が減らされ、大学教育にも大きな影響が出てきております。絵画を学ぶ上での基礎であるデッサンが未成熟のうちに入学してくる学生も増え、リメディアル教育も行っています。【添付資料4】は名画である「モナリザ」を模写させる過程をスキャンし、学生に見せたものです。デッサンは受験科目として必須で、誰もが一度は描いたことはありますが、実際に名画の模写をさせることで「明確な答え」に対して、自分がどこまでできるかを試すことで、自己の非力さに気付くことでしょう。

大学院の授業では【添付資料5左】のようなレンブラント等の模写をおこないます。17世紀バロック絵画は最高峰の技術を有しています。学生と当時の時代の顔料を使用し、手で絵具を練ることで、その時代歴史を感じることができます。【添付資料5右】はサンドロボッティチェリの模写です。この作品はテンペラ画で、テンペラ絵具は油絵具の出現の前段階の画材です。模写をしてみるとその技術レベルの高さを理解することができます。

### 【様々な画材へのアプローチ】

また西洋画の画材としては「油絵」以外に、鉛筆や、水彩、コンテ、木炭等様々な画材があります。学生たちはそのような画材に自主的に触れることは皆無で、こちらから道筋をつけてあげることも必要となります。20年前では考えられなかったことですが、今の学生は「手で描く」ということは「パソコンの画面にペンタブで描く」ことも手で描くと言うそうです。実際の画材に触れず描くことは弊害もあります。便利になった一方、失敗したら前に前の段階に戻ることができる容易さは失敗する経験を減らし、自己完結する学生が増えてきています。初めて絵を描く学生からよく聞かれることで「何を描いたらいいんですか」と言われます。その際私は必ず「恥をかきなさい」と答えてあげます。

たくさんの画材に触れることと同時に、自分たちの好きな作家研究なども行います。【添付資料6】は学生たちに好きな作家を挙げてもらい、その画家がどのような思いで描き、どのような方法で描いたかを推測させます。そして私自身がその作品一枚一枚を推測してどのように描いているかを学生の前で見た作品です。絵画は絵具による「物質」で出来ており、その物質がどのような層になっているかを理解することが出来たら、ある程度描くことができるということを指し示しました。またアニメーションの会社に就職したいと言ってきた学生には不透明水彩絵の具の使い方をその学生と学び、授業では30コマで15枚の作品を描かせ、その学生は見事に第一志望の会社に就職することができました。

### 【現場制作の重要性】

推奨しているわけではないのですが、今多くの学生が写真を見ながら絵を描きます。だからあえて実際の現場に行ってスケッチを行います。学生たちはまず自分の思い通り描くことができません。なぜなら今の学生たちは「写真」という媒体を絵に描くことに慣れすぎてしまっています。2次元（写真）を2次元（絵画）に直す作業と、**3次元（実空間）を2次元（絵画）に直す工程**には大きな差異が生じます。大抵の学生は屋外等の実際の現場の「空気」「温度」「匂い」「音」などに圧倒されることでしょう。高等学校等で美術の時間が削減され、高校時代に屋外で絵を描いたことのない学生が多くなってきています。これもリメディアル教育の一環と考えています。

技術の向上にはこれ以外に様々な方法を試してきましたが、代表的なものを列記しました。

## 2. コミュニケーション能力の向上

18歳で入学してくる学生はやはり「同級生」と長い時間を過ごします。大学に入っても多くの学生はサークルやバイトなどでないかぎり同級生と多くの時間を過ごすことでしょう。私が卒業した大学も同様でした。しかし佐賀大学の芸術地域デザイン学部（前身の美術工芸課程）では先輩後輩がとても仲が良く、この人間関係は非常に大きな武器となっています。下級生と上級生と同じ教室で多くの時間を過ごすことで、学生生活の悩みや、アルバイト、制作のことなど多くのことを相談し、コミュニケーション能力を培っています。また展覧会などの時には「講評会」を行い自分の作品のプレゼンテーションを行います。会社などの面接に行った学生が「先生の講評の方がよほど緊張しました。」と言っていたのが大変印象的です。「作品の話をする」ことは「**自分の内側、考えていること**」をアウトプットすることでもあります。今の学生にはこの経験は非常に大きな財産となります。

卒業研究（卒業制作）の際には、10月にまず4年生のみ作品コンセプトを説明します。12月初旬、4年生、大学院4年生は下級生に向け卒業研究の中間講評で自分の作品のコンセプト、進捗状況を話せます。2月初旬には最終講評で自分の作品について話をし、また4年間を振り返り、下級生に話をしてもらいます。佐賀大学着任後10年続けており、ゼミの学生は全員必ず参加するように伝えてありますから、2年生が4年生になった際どのような卒業研究を行い、どのように話が出来ようになっていくのかイメージがしやすく、このことで学生たちの風通しが良くなっているように思います。

## 3. 絵画の歴史に対する理解

1の技術でも述べたことと重複しますが、20歳の学生が作家としてやっていくにはその後長い年月が待っています。しかしレオナルドダヴィンチは1503年に「モナリザ」を完成させたといわれています。油絵だけでも500年以上の歴史があります。それ以前ではテンペラ画やフレスコ画などもあります。そして近代、現代にいたっては様々な歴史、技法が存在します。その歴史をふまえた上で制作活動を行っていくことが長い作家人生では必要となります。また歴史と技術はリンクしています。また変わり続けます。そのことに鋭敏に感覚を研ぎ澄ませることは作家になるためではなく、教員や社会人にとっても必要です。学生に良く言う言葉があります。「10年前はどうなっていますか？10年後どうなっていますか？」。10年前、これだけスマホが普及するなんて誰も予想していませんでした。20年前のIT革命もそうです。歴史から学ぶことを大切にしています。

#### 4. 展覧会の企画、運営

私は積極的に展覧会を企画、運営を行ってまいりました。いくつかの展覧会がアクティブラーニングといってもよいでしょう。まず赴任した2006年には「西洋画室の住人展」というものが開催されていました。これはゼミ生の研究発表でしたが、まだ仲の良い学生同士の間での展覧会であったように思います。展覧会は作家目的、その前段階の展覧会運営や人的交流目的、社会貢献目的など様々です。「礎展」というのは作家育成目的で、作品販売も行います。「S-YOU-GA」展は人的交流が主な目的とらえています。「西洋画」といっても様々な技法や考えがあります。今私が主に教えることができるのは「写実的表現」です。崇城大学には印象派的表現の先生や、古典的技法であるフレスコ画の第一人者の先生もおられます。そのような多岐にわたる先生方の意見を聞いたり、学生同士作品を展示することは大きな刺激となり、良い教育効果を生みます。また久留米市美術館での展覧会や、佐賀大学美術館でのワークショップを中心とした社会貢献的展覧会も学生主導で行います。詳しく述べていきたいと思ひます。

##### 4-1 礎展

「礎展」というの展覧会は2010年に始まりました。その前身となる展覧会は2006年銀座駿河台画廊で佐賀大学、西洋画専攻学生のグループ展を行いました。学生はどうしても「九州」にしか目が向いておらず、東京に目を向けさせる目的で始めましたが、この展覧会は非常に質の低いものとなり終了しました。その時の展覧会を見てくれた画廊のオーナーは「文化祭みたいだったよ」と言われます。その後、2009、10年と新橋にある画廊で行ったことが評判となり、2012年から「礎展」と名前を変え、場所も現在のギャラリーアートもりもとで開催しています。展覧会の出品条件は「作家を目指すもの」「日ごろの制作態度が優良なもの」「研究（作家活動）を続けていく意思があるもの」に限り私が人選を行います。この展覧会は8月のお盆明けの暑い時期にも関わらずたくさんの来客があり、作品も今年は初日に半数が売約となりました。学生にとっては売れることで、親等の理解を深めやすくなります。制作を続けて行くモチベーションともなります。アルバイトの量も減らせます。学生のファンが付いていることも少なくありません。展覧会では在校生は必ず東京に行くことを条件としており、客や画廊の従業員とのコミュニケーションは学生にとって外部の評価を聞く良い機会となっています。

##### 4-2 S-YOU-GA展

「S-YOUGA」というものを昨年から開催しています。これは九州にある「芸術系大学」の「九州産業大学」の産業のS、崇城大学芸術学部のS、佐賀大学のSのSと油画から取って「S-YOUGA」と私が命名しました。昨年は崇城大学とのみ開催しましたが、いつか九州産業大学にも入ってもらって展覧会が出来たらと考えています。佐賀大学の学生は私の指導しか受けておらず「技術は高い」が発想力は低いです。その代り、崇城大学の学生さんの作品は技術はあまり高くないですが「発想は豊か」です。崇城大学の教授、有田巧先生、熊谷有展先生と相談の上、それぞれの学生にメリットがある、また相乗効果がある教育的展覧会として、「S-YOUG」展を開いています。昨年は佐賀大学美術館で開催し、今年は熊本崇城大学ギャラリーで2017年11月開催する予定です。現在多くの大学で教員が減らされ続けており、教育の質保証というものが言われております。このような取り組みは学生同士、教員の交流を深めていくことが、日本美術界にとって有益なことにな

ることを信じています。

#### 4-3 その他の展覧会【添付資料7、8】

昨年から佐賀市内のギャラリーで学生の小品展も開催しています。基本的にチラシの製作、情報宣伝、搬入出等、学生が主体となって執り行います。また佐賀大学の「来てみんしゃい佐賀大学」の助成を受け、大学美術館でも展示を行っています。2016年には「制作の現場」2017年「DRAWLING」展と開催し、両展覧会とも2000人以上のお客様が来場してくださります。このようなアクティブラーニングはおそらく日本で一番行っている教員であると自負しますが、学生の負担増にならないようにいつも気にしながらやっております。学生たちは「絵を描く」だけでない様々な能力を身につけ、卒業してくれていっています。

#### 4-4 展覧会にまつわる懸念

礎展は近年ではこの人選が非常に困難を極めます。「出したい人全て出品させてあげたらよいのでは」と思われる方もいるかもしれませんが、出品する以上「売買」も行います。継続してこれからも制作するかどうかを見極めるのは大変な作業です。原則3年生以上と卒業生で行うのですが、初めは5人で始めた展覧会が、今年は17名での展覧会となりました。今では学生たちが憧れる展覧会になってしまい、簡単に作家になるための道筋ができてしまったがために、学生が似た傾向（作品や制作態度）になってしまっていることが危惧されます。また礎展では沢山のファンが付いてきてくださるのはありがたいのですが、そのファンは学生を「応援」する動機だけではないように感じ、今ソーシャルネットワークなどで注意喚起せざるを得ない状況となっています。画廊界限では「ギャラリーストーカー」と言われているそうです。このように学生が東京の画廊で、大学(ゼミ)単位で行う展覧会の取り組みは、ここ最近様々な大学で行われるようになってきましたが、実は大変難しいことを展覧会をやってみて感じるはずで、学生を作家と同等と扱うことは、「教育」「研究」の弊害となることも多々あります。例えば、売れっ子になる学生も現れたりします。その学生は、「売れっ子」と勘違いし、売りやすいサイズの作品しか描かなくなったり、画廊から依頼がないと描かないという傾向も出てきます。いわゆる「奢り」のようなものが見受けられる学生が出てきたことも否めません。

#### 5. 継続力

まず私が描き続けることが大切だと思います。学生たちにプロとしての仕事を見せ続ける以外ないと思っています。自分自身とにかく厳しく、楽しく仕事をするを大切にしています。「自由」にすると人は怠け、描かなくなります。バランス良く描き続ける体力を身につけさせるように心がけています。今まで教育をしてきましたが、圧倒的に教育効果が高いのは「見せる」ことだと思います。教員は圧倒的な「技術」を見せた時、学生たちは充実し満足しているように感じます。私自身は基本的には自分の研究室や、自分のアトリエで制作を行いますが、1年に2カ月程度は学生と同じの部屋で制作することにしてあります。【添付資料8】私が同じ部屋で制作すると、学生たちはやはり目の色を変えて見てきます。【添付資料8】の作品を描いたとき、ある学生が「先生、(私が) トイレ行っている間に木が一本増えました。早いですね!」と言われたことが印象に残っています。忙しい大学業務の中ですが、学生のために少しでも時間をとるように努力しています。



## 4) 学習成果

1、下記リストは教育関係のことで雑誌に掲載されたものです。

1. 「鉛筆デッサンのコツ」遊友出版（2006年発行）学生授業作品を掲載。【添付資料10】
2. アートコレクターズ（2015年、12月号）「写実絵画の教育現場」（小木曾誠、鶴友那、本木ひかり、伊勢田理沙）【添付資料11】
3. 美術の窓（2014年）11月号、「模写から学ぶ絵画技法」（大学院授業作品掲載、小木曾誠、米村太一、鶴友那、牧弘子他）【添付資料12】
4. 週刊ダイヤモンド2017年4月号「アートと金」136項【添付資料12】

2、卒業生による在校中の全国公募展での受賞歴は以下の通りです。【添付資料9】

仁戸田典子（平成23年度大学院修了）2010年 第45回昭和会展出品、昭和会賞受賞

本木ひかり（平成22年度卒業）2009年 第44回昭和会展入選

鶴友那（平成24年度大学院修了）2012年 新生堂 個展

伊勢田理沙（平成25年度修了）2013年 第88回白日会展入選

八頭司昂（平成26年度修了）2013年 第22回英展~人物・風俗~ 大賞 受賞、第22回MCAGP(三菱商事アート・ゲート・プログラム)入選

上田美里（平成25年度卒業）2012年佐藤大清真展、大賞受賞

坂井華子（平成27年度修了）2014年 第90回白日回展 新人賞

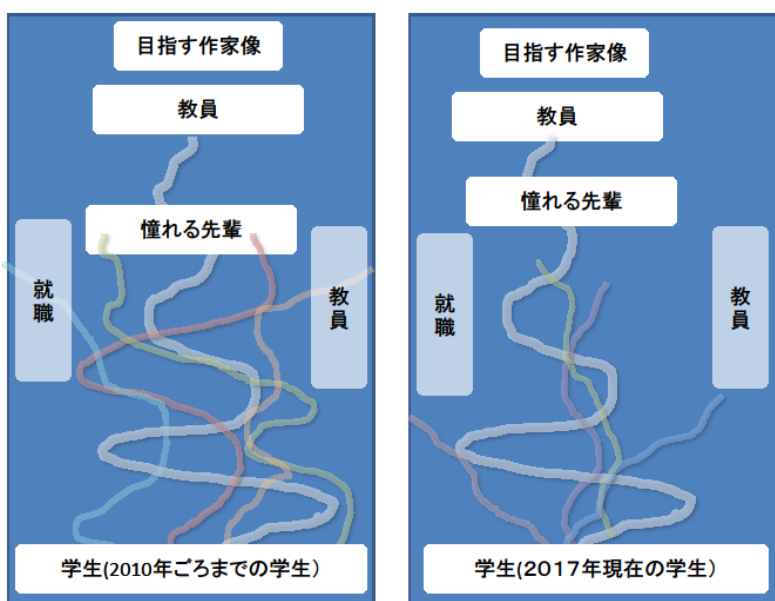
松本実桜（平成27年度修了）2014年：第90回白日会展、損保ジャパン美術財団賞

小野千佳子（平成28年度卒業）2017年第93回白日会展、白日賞

峰松詩織（平成28年度卒業、現在研究科1年）2017年、第5回青木繁記念西日本美術展、西日本新聞賞

植野綾（平成29年度卒業予定）2017年、第5回青木繁記念西日本美術展、賞

## 5) 教育の改善及び今後の目標

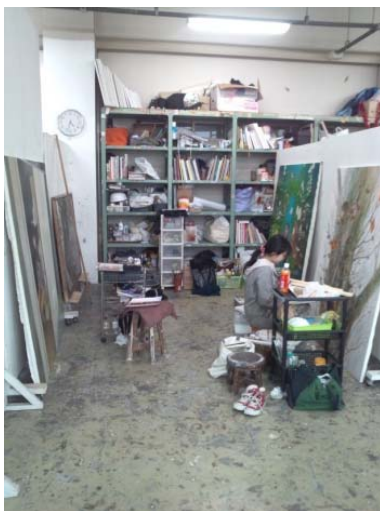


10年教員をしていると、沢山の学生を見てきました。その成長過程でとんでもない方向の作風に向かっていく学生もおります。その作風でも継続し描いている学生はいつも見守るようにしています。私の経験の中では収まらない作品を作ってくれるのではないかと教育者としての期待に胸を膨らませていました。学生自身の「自分が本当に描きたいもの」や「表現したいもの」が見えてくる瞬間で

あり、教育の大きなチャンスであることも知っています。その際は出来るだけ学生の話に耳を傾け、出来るだけ最良の方法を考えるようにしてきました。そんな指導の賜物か、個性豊かな学生たちが育っております。しかし現在、私の「教育者」としての好奇心をくすぐる、また「作家」同士でしか感じえない新しい表現の模索をする学生がとても減ってきた気がします(図参照)。美術教育などでよく「自由」に描きなさいと指導する方針があります。自由美術教育運動や、70年代に起きたアメリカの抽象表現主義を標榜し、美術の文脈なく指導する流れは私にとっては本意ではありません。しかし現在の学生は「受動的」でかつ、先輩たちが歩んできた道を歩む傾向が増えてまいりました。「作家」としてのやり方は様々で個々違ってよいのです。この課題は様々な大学の教員から言われており、東京芸術大学の教員でさえ嘆いている現状がございます。この問題を打開するにはまず私自身が変わり続けなくてはなりません。いつになるか分かりませんが、今後の目標として日本国内に留まることなく、海外での制作発表も視野に入れた研究発表を行うことで、学生たちにまた新たな道を見せることになるかと信じています。また近い目標としてワークショップなどで、若い人たちや一般の芸術に興味のない人たちに私の「芸術についての考え方」を広く理解してもらい、美術をする喜びを共有し、自分自身も楽しみ、「そうぞう」していくことが今後の目標となるでしょう。

## 6) 添付資料

【添付資料 1】 学生の制作環境。パーテーションは教員自ら作成したもの。



【添付資料 2】



教員自ら制作した作品制作工程表。

【添付資料 3】 学生の 1 年次西洋画及び芸術表現 A 授業作品。全て初めて描いた油絵作品



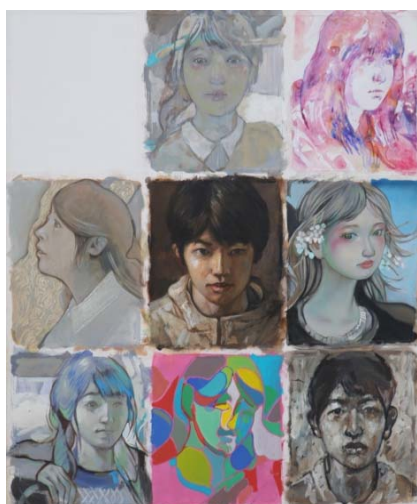
【添付資料4】鉛筆デッサンの描き方。A4サイズに描かせ、就職活動のポートフォリオ作品としても利用できる。



【添付資料5】レンブラント(左)とボッティチェリ(右)模写作品。この取り組みは雑誌でも取り上げられた。



【添付資料6】様々な画家の描き方を推測し描いて見せた実例。



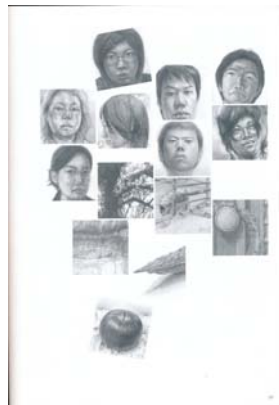
【添付資料7】その他の展覧会



【添付資料8】教員自ら学生と制作する様子



【添付資料9】「鉛筆デッサンのコツ」遊友出版（2006年発行）学生授業作品を掲載。



【添付資料10】アートコレクターズ2015年、12月号



【添付資料11】模写から学ぶ絵画技法（大学院授業作品を掲載）



【添付資料12】週間ダイヤモンド「アートと金」

【添付資料13】



仁戸田典子

本木ひかり

鶴友那

八頭司昂



伊勢田理沙



坂井華子



松本実桜